

桜田 治（さくらだ・ただす）

1、プロフィール

詩人、歌人。青森市立青森商業学校三年頃から短歌を始めている。卒業後、三本木に帰郷し、闘病（結核）と詩作の生活を続ける。22歳の若さで逝く。

<生没>

1908(明治41)年10月15日～1930(昭和5)年1月15日

<代表作>

桜田治遺作詩歌集『白い涙』(ナザレ社)『桜田治五十年忌記念誌』

<青森との関わり>

上北郡三本木町元町に生まれた。闘病（結核）と詩作の生活を続ける。行年二十二。詩と短歌を創作。

2、作家解説

明治41(1908)年、上北郡三本木町に生まれる。大正10年2月に三本木尋常小学校卒業。11年4月に青森市立商業学校に入学し、青森市内に下宿した。五年にわたる学窓生活ではスポーツマンとして活躍した。スキーのジャンプの選手であり、テニスも好んでやった。また三年頃から短歌を始めている。青年教師の横山武夫の薫染があったかもしれない。県立となった青森商業学校を昭和2年3月に卒業。

三本木に帰郷。闘病（結核）と詩作の生活が二年間続く。タダス・牧遊歩・楠精児・燭捨人・青人・曙光・鬼堂・倅泣・三本原紫光・長夢・騎北等、気持ちを更新する意味から数多くのペンネームを用いる。病中の歌は百数十首にのぼる。昭和5年1月15日逝去。行年22。

5年3月「ナザレ」という詩を中心とした文芸総合誌が創刊された。治も同人として加わり文芸活動を展開するはずであった。そしてナザレ社が6月9日、桜田治

遺稿詩歌集『白い涙』を発行して追悼した。序を南条三樹雄、詩 19 篇、短歌 159 首を収録。編集は、詩を南条三樹雄、短歌を米田一穂が担当したという。

また 54 年の祥月命日に『桜田治五十年忌記念誌』が、発行人桜田悌二、編集人桜田恒郎で刊行された。『白い涙』に未発表の作品を加え、川上千尋・赤坂友雄・阿部陸奥雄・桜田卓三・桜田亮が思い出を、桜田恒郎があとがきを書いている。

3、資料紹介

○『白い涙』

図書

1930(昭和5)年6月9日

県立青森商業学校を卒業後、三本木に帰郷し、闘病(結核)と詩作の生活を続けた二年間の作品を中心に、詩 19 篇、短歌 159 首を収録。序を南条三樹雄。編集にあたり、詩を南条三樹雄、短歌を米田一穂が担当したという。